

(第十八章)

『根本中論』の解説、ブッダパーリタ。第七卷

二無我を詳細に説く>無我の真如へ入る方法>章の著述を説く>真如へ入る方法> [真如の見解を決定する]

言う。「もし、事物や無事物であるとの見解は恒常と断滅の過失の背理となるので真如ではないならば、君の真如とは何であるかと、如何様に真如を了解するとなるのか、それを言いたまえ。」

真如の見解を決定する>我が自性として成立したことを否定する> [解脱を欲する者が最初に分析する仕方]

説く。最初に始められてから、真如を良く示された。要約すれば、外と内についてまさしく無我や無我所¹であると見ることが、聖なる真如であるが、真如の見解を修習したことによって、真如を了解することになるだろう。

我が自性として成立したことを否定する>それから無我の見解を決定する仕方> [我と蘊が同一本性であることを否定する]

言う。「如何様に、外と内について、無我と無我所であると見ることになるか。」

説く。ここで、完全な考察を具えた真如を見ようと欲す者によって、このようにそれぞれに正しく考察されるべきである。

その「我」というものであるそれは、まさしく諸蘊であるのか？あるいは諸蘊より別他であるのか？

その「我」とは、まさしく諸蘊か、諸蘊より他のものとなる以外ない。ここで他の様相であると言うそれら一切も、他そのものか、まさしく他ではないと言うのみに収められるが、双方ともに不合理である。何故かといえば、

もし、蘊が我であるならば、
生と壊を持つものになる。
もし、諸蘊より他であれば、
蘊の定義が無いとなる。 1

先ず、もし諸蘊そのものがまさしく我であるとなれば、そう見れば生と壊の主体となる。(何故ならば) 諸蘊は生と壊の主体である故である。そこでは我がまさしく多数である背理ともなるが、我について言説することがまさしく無意

¹ 無我や無我所：実在する「私」と「私のもの」が無いこと。

味ともなる。(何故ならば)「我」とは蘊の異音同義のみに尽きる故である。そう見るので先ず、「諸蘊そのものが我である。」とは不合理である。

それから無我の見解を決定する仕方> [我と蘊が別本性であることを否定する]

もしまた、諸蘊より他であるとなれば、そう見れば蘊の性相(定義)ではないとなる。諸蘊は生と壊の性相であるので、然れば、我は諸蘊より他である故に、生と壊の性相ではなくなるだろう。そう見るので恒常となり、我が恒常であるならば一切の努めて始めることはまさしく無意味となる。(何故ならば)このように、変化しない恒常において何を為すことがあろうか。そう見るとしても、我が存在すると考えることはまさしく無意味となり、それにおいて僅かにも入るとも、退くともならない。そう見るので、我は諸蘊より他であるとも不合理である。

真如の見解を決定する> [それによって我所が自性として成立したことも否定したと示す]

その者は、そのように知恵で確信してからもそれぞれに正しく考察し、

我性が有るのでなければ、
我所が有ると何処でなろうか。

考察したならば、もし、我そのものが一切の様相において不合理であれば、我所が有ると、何処でなろうか。このように、「それらの『我』というものの」というが、その我も無く、それが無ければ「そのこれである。」というように、如何様に合理となろうか。そう見るので、我所も不合理である。

真如へ入る方法>それが修されることで過失が退く次第>過失が退く次第> [有身見の退き方]

そのように、外と内について我と我所であると見解しないことは真如を見るのであり、その者はそれを修習し、堅固にさせる。それを修習し堅固にする者の、我と我所への執着は寂滅するとなるので、

我と我所が寂滅する故に、
我執と我所執は無くなる。 2

そのように、我や我所であると顕かに執することが寂滅する故に、その者には我執と我所執が無くなる。

過失が退く次第 > [それへの反論難を斥ける]

言う。『彼がそのように清浄をあるがままに見るならば、我執と我所執が無くなるだろう。』という、まさしくそれが我であるので、それは有る故に、我と我所も全く確実に有るのである。」

説く。

我執と我所執が無い者。
それも有るのではなく、
我執と我所執が無いと、
見る者によって、見られない。 3

そのように「我執は無く、我所執は無い」というそれも有るのではなく、それは近取に依拠して名付けられたものであると示し、このように世尊も、

「命ある者よ。『この名はこれである』や『骨（父系）はこれである』というものは、近取に結ばれておらずにプトガラの名や骨は無い。」

と説かれた。そう見るので、ただ近取に従って述べられているに尽きず、我執が無くなり、我所執が無くなる他の何かは何も無い。もし有るならば、それが有れば、如何様に我執が無くなり、我所執が無くなるとなろうか。

もしそれらが有るとしても（我執が無くなり、我所執が無くなると）なるならば、そう見れば、彼のそれらは誤った見解のみとなるが、真如を見るのではない。阿闍梨聖提婆も、

「もし、我というものが有れば、その無我とは正しくない。あるいは真如を了解するか、涅槃はそれによって偽りとなる。」²

と説かれた。

そう見るので、我執無く我所執が無いと見る者を誤って見解する、知恵の目が衰えた者によっては、真如はまさしく見られない。

過失が退く次第 > [取が尽きることによる生の尽き方]

内と外そのものに対して、
我と我所であると思うことが尽きれば、
近取は滅すとなり、

² 「もし…となる。」：『四百論』第 10 章 20 偈。「もし『我』というものがあれば、無我を思うことは正しくない。『真如を知り確信することより、涅槃を得るとなる』ということも偽りとなる。（パツァブ訳）」

それが尽きることによって生が尽きる。 4

ここで、内と外そのものを「その我」や「我所」という、それらを誤って捉えることが尽きたとなれば、近く取らせるものは無く、近く取られる対象であるものも無いので、四様相の近取も滅すとなり、近取が滅したことによって有（輪廻）は滅し、有（輪廻）が滅したことによって生が尽きるとなることを、「解脱」という。

それが修されることで過失が退く次第> [解脱を得る方法]

そのように清浄を如実に見る者が真如を了解するのであるが、真如を了解することによって、解脱するとなる。

業と煩惱が尽きることによって解脱する。
業と煩惱は妄分別から。
それらは戯論から。戯論は、
空性によって滅すとなる。 5

ここで、業と煩惱とは生の因である故に、業と煩惱が尽きるので「解脱」という。それらの業と煩惱も正しくない分別作用より起こったのであるが、自性として有るのではない。煩惱とは、適正でない分別作用より起こったのであり、斯くもただ一つの対象に対しても何人かは執着し、何人かは嫌悪し、何人かは蒙昧となるので、それ故に、諸煩惱は妄分別より起こった。煩惱を持つ心を見える身体と言葉と意が、実際に行うことを「業」といい、このように世尊も、

「無知を具えたこのプトガラは、福德より起こった顕現される行も顕かに行う。」

と詳細に御言葉を賜れた。そう見るので、業と煩惱は、正しくない分別作用である因より起こったのである。それも、それらの正しくない分別作用は、戯論（心的派生）より起こった一世間人の戯論より起こった。世間人の得・不得等の諸法（現象）に対して『これは真実である。』と思い執着する心を持つ者達は、それやそれと分別をするので、それ故に緒分別は戯論より起こった。戯論は空性によって滅すとなり、その得・不得等の世間人の戯論は、空性によって滅すとなる。事物の自性は空性であると了解することによって滅し、空性を了解して滅す。そう見るので、空性とは真如であるが、空性を修習したのみによって真如を了解するとなり、まさしく真如を了解することを「解脱」といい、阿闍梨聖提婆も、

「要約すれば、法とは傷つけないこと（慈悲）であると、如来方が説か

れた。空性と涅槃であり、ここにはその二つのみである。」³
と説かれた。

章の著述を説く>それにおいて、経証との矛盾を排斥する> [経証との矛盾を排斥する・本義]

言う。「もし、そのように我と我所が無ければ、如何様に仏陀世尊方がそれやそれと我を示されたのか。」

説く。「無我のみである。」とも言わず、以降でも
「そのように、近取より他ではない。それは近取そのものでもない。我は、近取が無いのではない。無そのものであるとも、それは確定しない。」

4

と現れる。しかしながら、有情達の思いや潜在（意識）を知ることに通暁された仏陀世尊方は、所化⁵達の顕わな執着を斥ける為に、

「我である。」とも名付けられ、
「無我である」とも示された。
諸仏が、我と、
無我は何も無いと示された。 6

そこで、『この世間は無い。』『あちらの世間（来世）は無い。』『有情は偽りであり、生は無い。』と思うそのような見解が起こった所化に対して、誤った思い込みに執着したことによって心が蒙昧な、あちらの世間（来世）に依拠せず、世間のあり方より外れて慎まず、地獄の大絶壁に直面するそれら有情の「我は無い」とする見解を斥ける為に、「我である。」とも名付けられた。

ある所化において、『善・不善の諸業の行為者と、それらの望ましい・望ましくない諸果を食う（経験する）ことと、束縛と解脱等の所有者を示す（我）というものは、何か有る。そうでなく我が無ければ、それら一切はまさしく無意味となるだろう。』と思うそのような見解が起こった、輪廻の大海へ落ちた、我執と我所執の海獣に既に捕えられた、見解の河によって心が逸れた、輪廻の楽に執着する者達の我見を斥ける為に、「無我である。」とも示された。

³ 「要約・・・である。」：『四百論』12章23偈。「法とは、要約すれば傷つけないこと（慈悲）であると、如来方が説かれた。空性と涅槃であり、ここにはその二つのみである。（パツァブ訳）」

⁴ 「その・・・しない。」：『根本中論』第27章8偈。

⁵ 所化：教化される者。弟子。

善資量⁶が完全に熟した、輪廻の大河を越えることのできる、勝義⁷の話の器となったそれら善良な所化達へは、勝義の真如を示す偉大なる導引者である仏陀世尊方が、「この幻は幼子を欺く。これに我と無我の何ものも無い。」と示される。阿闍梨聖提婆も、

「無と有と双方と、双方でないものも示された。病に基づいて確かに、薬が合うとなるが如く。」⁸

と説かれた。

あるいはこれは他であり、真如を見ることに背を向けた、一切を知るのではないにも拘らず一切智であると顕かな傲慢を持つ、自らの推論に従って「我が無ければこれら一切は不合理である。」と恐れる何者かによって、「我である。」とも名付けられた。

その如く、蒙昧の無い知恵者達が世間において蘊であるとする、業や衆生が隠蔽分⁹となった他の者達によって、「無我である。」とも示された。

障碍¹⁰の無い、尽く解放された智慧を得られた一切智、一切をご覧になる仏陀世尊方が、衆生を利益すると誓われて、「その二つとも無い。」と確実に明らかにされ—我と無我ではない、

「これが有るので、これは起こるが、これが無ければ、これは起こらない。」

という中の道そのものを示された。

それにおいて、経証との矛盾を排斥する> [真如を如何様にも述べるできない理由]

ここで言う。

『戯論は、空性によって滅すとなる。』

と言ったことについての正理は何か。」

ここで説く。

述べられる対象は退いた。

何故ならば、諸事物は空であると見れば、述べられる対象そのものが退くと

⁶ 善資量：善き福德と智慧の集積。

⁷ 勝義：聖なる真実。空性・真如等。

⁸ 「無と…如く。」：『四百論』第 8 章 20 偈。「有と無と有無と、双方ではないとも示された。病に従って一切も、薬というものになるのではないのか。(パツァブ訳)」

⁹ 隠蔽分^{おんぺいぶん}：隠されたものごと。正しい理由によって推測されるものごと。

¹⁰ 障碍^{しょうげ}：解脱と一切相智（仏陀の智慧）等を得る障り。

なる故に、戯論（心的派生）は、空性によって滅すとなる。このように、述べられる対象が有ればそれに依拠して戯論が有るとなるが、述べられる対象が無ければ、拠所の無い戯論が如何様に有るとなろうか。

言う。「その述べられる対象は、如何様に退くとなろうか。」

説く。

心の所行¹¹が退いたことによってである。

心の対象とは、色形等諸々の対象であり、何故ならば、その心の所行である色形等が無くなる為に、その述べられる対象が退くことになる。このように、述べられる対象は色形等であるが、そう見れば何が述べられるとなろうか。

言う。「その心の所行である色形等が、如何様に退くとなろうか。」

説く。

生じておらず滅していない、
法性は涅槃に等しい。 7

何故ならば、その者が清浄を如実に見て、生じておらず滅していない法性は涅槃に等しいと良く知る故に、その心の所行は退くこととなる。そう見るので、戯論は、空性によって滅すとなる。¹²

阿闍梨聖提婆も

「有（輪廻）の種子とは識であり、諸対象はその所行（享受対象）である。対象に無我を見るならば、有（輪廻）の種子は滅すことになる。」¹³と説かれた。

言う。「『この世間（今世）は無い。あちらの世間（前世・来世）は無い。有情は偽りであり、生は無い。』等のその見解と、『一切事物は生じておらず滅していない』という見解の二つに、如何なる違いが有るのか？」

¹¹ 所行：ここでの意味は、働く対象。享受する対象。

¹² 戯論は…となる。：『根本中論』第 18 章 5 偈 4 行目。

¹³ 「有…となる。」：『四百論』第 14 章 25 偈。

説く。その二つにおいて違いは非常に大きいけれど、君は空性の意味を全く知らずに『その二つは似ている。』と思惟する。ここで、それぞれに考察しておらず平等にすることと、それぞれに考察して平等にすることの二つは、平等にすることにおいては勿論似ているけれど、それぞれに考察しておらずに平等にすることは無知の結縛を具えると示された。しかし、もう一方の平等にすることは仏陀世尊方が全く携わったことであるので、その二つにおいて違いは非常に大きい。ここでも「この世間は無い。」等のように見る者は、無知によって全く蒙昧された心を具えた者であるが、「一切事物は自性が欠如する故に、生じておらず滅していない」と見るもう一方は知ることを経過しているので、その二つに違いは非常に大きい。

他にも、無そのものを見ていないながら「この世間は無い。」と言葉だけを述べることについては、例えば生まれながらの盲目者が「こちらの方向が楽だ。」と言ったとしても、目が無い故に、見ないことによってそれを間違え、落下することになるが如く、その者も「この世間は無い。」と述べようとも知の目が無い故に見えないので、それらの過失によって汚されることになる。

他にも、例えばある者が論争すれば、真実となる意味のみにおいて二人の証人が提示される。そこで一人はそのものごとを現実に見たのであるが、二人目はそのものごとを現実に見たのではなく、間違った面から、あるいは懇意で抱き込まれた者である。その二人ともにそれについて証言させたならば、そこで一方が、そのものごとは如何様に真実であるかと証言させたとしても、その意味は現実にもならない故に、偽りともなるが、非法や、不快さも具わることになる。もう一方がそのものごとを証言したならば、その意味は現実であるとなる故に、真実を証言するのでもあるが、法や悦ばしさも具えるとなるが如く、一切事物は空であり、空であるが故に生じておらず滅していないものであるとしても、直覚によって知ることが有る者自身が、善良さを具え賞賛されたのである。もう一方は空性が現実となっていない故に、見解の過失によっても汚されるが、賢者方に誹謗されることにもなるので、それ故にその二つは、非常に大きな違いがある。

阿闍梨善羅睺羅による『般若波羅蜜論』よりも

「まさしくおまえを見れば縛られ、見ずとも縛られる。まさしくおまえを見れば解放され、見ずとも解放される。」

と説かれた。そう見れば、これは真如を知る汚れない知恵の目を具えた者の対象であるが、これを知らぬ大きな暗黒によって知恵の目が覆われている者達の対象ではない。

他にも、君は賢いと思いあがった心を通じて見解を思索するに等しく、吾輩

に論駁するが、実在と虚無を語る者達に対してはしない。それにも違いが有ると説こう。

如何様にといえば、実在と虚無を述べることは見解の影響によってであり、吾輩は、諸事物は兎の角の如くまさしく無いと見て、言葉の諸々の過失を尽く捨て去る為に「まさしく有るのでもないが、まさしく無いのでもない。」と言わない。このように、それらは縁起生である故に、如何様に有性（実在）や無性（虚無）が映像の如く見えるかを言うので、君は、ガラス球をサファイアの値段で売ろうと思った通りの果も得ないだろうが、自らの心が浅はかであるとも示した如くとなった。

言う。「もし、そのように一切事物が涅槃に等しいのであれば、法と非法に違いは無い故に、一切の努めはまさしく無意味とならないか？」

説く。何？君は清浄を如実に見ることに努めが有ると見るのか？

先に、

「述べられる対象は退いた。心の所行が退くことによって。」

と既に示したので、それ故に、尽く蒙昧な心具える者に努めは有るが、真如を見ることにおいては如何なる行為も無い。斯くも、

「行為を為した。これより他は無い。」

と説かれたことや、その如く

「無明を具えたこのプトガラは、福德より起こった実現されるものごとも実行する。」

と説かれた如くである。

阿闍梨聖提婆も、

「全てが無ければ何を為すことが有ろうかと、君は恐れが生じることになる。もし行為が有るならば、この法（現象）が退くのではない。」¹⁴

と説かれ、そう見るので

「法性は涅槃に等しい。」

というこれは、勝義である故に説かれたのである。

章の著述を説く > [真如へ導く次第]

世間の名称の為に、

¹⁴ 「全てが…ない。」：？『ブッダパーリタ（チョクロ訳）』で聖提婆を引用する場合、概ね『四百論』を引用する。『四百論』新訳（パツァブ訳）で似た意味の偈は「もし、全ての事物は無い故に、虚無となるならば、そう見るのである。そして全ての方向で、事物が無いとは正しくない。」（第 16 章 19 偈）。

一切は、まさしく清浄と、非清浄と、
清浄と非清浄であり、

このように世尊も、

「世間に有ると公認されたものは、私も有ると言う。世間に無いと公認されたものは、私も無いと言う。」

と説かれたので、それ故に、世間での名称を付ける時に、世間においてまさしく清浄であると公認されたそれは、世尊も「まさしく清浄である。」と説かれた。世間においてまさしく清浄ではないと公認されたそれを、世尊も「清浄ではない。」と説かれた。世間において、まさしく清浄であり、まさしく清浄ではないと公認されたそれを、世尊も「まさしく清浄であり、まさしく清浄ではない性である。」と説かれた。

このように、例えば、二人の村人が所用で都へ出向いて、観覧の為に寺へ入って絵を見始めた。そこで一方が言った。「手に三叉の槍を持っているこの方がビシュヌ神だ。手に輪を持っているこの方が大シヴァ神だ。」

もう一方が言った。「君は間違っている。手に三叉の槍を持っている方は大シヴァ神だ。手に輪を持っている方はビシュヌ神だ。」

そのようにその二人は言い争ったが、付近に一人の梵志が居たので近くへ行っただけで礼拝し、彼に各々の考えを語った。すると、その梵志は一方に「君の言うことが正しい。」と言い、もう一方に「正しくない。」と告げたが、そこでその梵志は「ここには大シヴァ神も何も無いが、ビシュヌ神も無い。これらは壁面に依拠した描かれた絵である。」と言われたように理解できる。しかし、世間の名称に従って「これは真実である。」「これは真実ではない。」と言ったことに、虚言の過失を持つとならぬが如く、世尊も諸事物は自性が欠如するとご覧になろうとも、世間の名称に従って「これはまさしく清浄である。」「これはまさしく清浄ではない。」「これはまさしく清浄であり、まさしく清浄ではない。」と説かれた。

勝義としては、

非清浄ではなく清浄ではない。
それが仏陀の教導である。 8

幻や、夢や、逃げ水や、影像や、こだまのように自性が欠如する事物を、如何様にまさしく清浄や、まさしく清浄でないかと述べようか。それ故に、それは仏陀世尊方の教示が、有性と無性の過失と離れ、一切の非仏教徒と共通ではな

い勝義を明らかにするのである。

あるいはこれは他の意味であり、ある者は「一切は有そのもの（実在）より生じる。」という。他の者は「果が以前に無い因より生じる。」という。ある者は「有無より生じる。」という。

仏陀世尊方の教示は、事物は因と縁より名付けられるに過ぎず、有無（より名付けられるの）ではない。そのようにも迦旃延¹⁵へ、

「この世間は二つに留まる。概ね有性に留まるか、無性（虚無）に留まる。」

と説かれた。そう見るので、仏陀世尊方が世間の名称に従ってもそれやそれらを説かれたので、それ故に、真如を見ようと欲する者達の世間の名称に従って説かれた言葉に顕わに執着することはせず、真如であるそのものを捉えたまえ。

章の著述を説く > 真如の性相 > [聖者方の真如の性相]

言う。「真如の性相（定義）は何であるか。」

説く。

他より知るのではない。寂靜で、
諸々の戲論が派生させていない。
分別は無く、別義ではない。
それが真如の性相である。 9

「他より知るのではない」とは、ここで、他より知ることが無い一経証は無く、己の現前となり、「まさしく己の現前」という主旨である。「寂靜」とは、「自性が欠如する」という主旨である。「諸々の戲論（心的派生）が派生させていない」とは、「世間の諸法（現象）と離れた」という主旨である。「分別なく」とは、「これ」や「これだ。」という様相として考察されていないことである。「別義ではない」とは、「これでもあるが、これでもある。」と意味を分けることが無いことである。

そこで、何故ならば分別が無い故に、諸々の戲論によって発されていないのである。何故ならば、世間人の諸法（現象）によって発されていない故に、寂靜である。何故ならば、寂靜である故に別義ではなく、それ故に、そのような本性を知ることは自ら知り、他より知るのではないことが、真如の性相である

¹⁵ 迦旃延^{かせんねん}：釈尊の十大弟子の一人。

と知りたまえ。

真如の性相 > [世間人の真如の性相]

これも真如の他の性相であり、

何かの依拠して何かが起こる。
それは先ず、まさしくそれではない。
それより他でもない故に、
それ故に断滅ではなく、恒常ではない。 10

このように、何かの依拠して何かが起こるものは、先ず、真如（まさしくそれ）ではない。それより他でもなく、もしそれが、それより他であるとなれば、それが無くとも起こることが正しいけれど、起こらないので、それ故にそれより他でもない。

例えば、種子に依拠して芽が生えたことでは、ただ種子のみであるものは、芽のみであるものではないが、種子より他である芽の自性は無い故に、種子より芽は他でもないが如くである。そのように、何故ならば何かの依拠して起こったものは、まさしくそれでもないが、それより他でもない故に、断滅でもないが恒常でもない。

このように、種子そのものが芽であるとなれば、種子は恒常になるだろう。何故ならば、種子そのものは芽ではない故に、種子は恒常ではない。

もし、種子もまさしく他であり芽も他であるとなれば、そう見れば種子は一切の様相において継続が絶えるので、断滅となるだろう。何故ならば、種子より芽は他ではない故に、種子が絶えるのではなく、阿闍梨聖提婆も、

「何故ならば、事物は入ることになる。然れば断滅とならない。何故ならば、事物は退くことになる。それ故に恒常とならない。」¹⁶

と説かれた。

そう見るので、それも、まさしくそれ自体か、まさしく他であると述べられる対象ではない故に、恒常でもないが断滅でもないので、真如（それのみ）の性相である。

章の著述を説く > [その意味は必ず論証されなければならないと示す]

同義ではなく、別義ではない。
断滅ではなく、恒常ではない。

¹⁶ 「何故…ならない。」: 『四百論』第 10 章 25 偈。

それは、仏陀・世間の
守護者が示された甘露である。 11

そのように、まさしく同一義ではなく別義ではない、断滅ではなく恒常ではない、同一と別や断滅と恒常の過失より外れた、最高に深甚な、勝義の真如を明らかにする、その善趣と浄化解脱への道の分類は、世間と出世見の樂を得させる為に、一切智で一切をご覧になり、十力の能力を具え不動の慈愛を持つ仏陀世尊方が示された甘露であり、それを成就させたまえ。

このように、それに入門した者達自身の現前となったものは、ただ短期間で成就されるとなる。まさしく資量を為していないことで短期間で成就していない者達も、他の転生において確実に成就するとなり、阿闍梨聖提婆も、

「真如を知る者が今生で、貪欲から離脱を得ていないとしても、他の転生で努め無く、確実に得る。業の如くである。」¹⁷

と説かれた。

完全な仏陀方が現れておらず、
声聞方が尽きたとなろうが、
独覚の智慧は、
依拠すること無く良く生じる。 12

もしまた、これに僅かに慣れ親しんだ者達に、百にも（万が一）完全なる仏陀方が現れていないか、声聞方が尽きたとなり、縁を具えなくなったとしても、彼らが以前慣れ親しんだ因より起こった、他より知るのではない独覚の智慧は依拠すること無くとも、縁より良く生じることになる。

その方のそのように教示されたこの甘露を成就させる者には果が有るとなるので、そう見るのなら、完全な考察を具える、輪廻の荒野を捨て去ろうと欲す、甘露の境地を得ようと望む者達が、まさしくこれを努めて成就すべきであり—これのみより、勝義が確実に成就する。

無我の真如へ入る方法 > [章の名を示す]

「我と法を考察する」という第十八章である。

DECHEN 訳

¹⁷ 「真如・・・である。」：『四百論』第 8 章 22 偈。「真如を知る者が、もしここで、涅槃を得ていないとしても、来世において努めることなく、必ず得ることになる。業の如くである。(パツァブ訳)」